

飲酒量と死亡率の関連、心臓血管病にはみられず

欧州におけるがんおよび栄養の前向き調査（EPIC）により飲酒と死亡率の関連を調節する因子の役割を調べ、死亡の絶対リスクを推定するための大規模コホートを実施した。本研究は欧州 10 カ国の 23 施設で実施され、登録時にがん・糖尿病・心臓発作・脳卒中に罹患していなかった男女 380,395 人を平均 12.6 年間追跡した。20,453 人に致死的事件が発生し、そのうち飲酒がリスク増加と関連するがん（上部気道消化管がん・肝臓がん・大腸がん・乳がんなど）による死亡は 2,053 人、心臓血管病による死亡は 4,187 人、暴力による死傷は 856 人であった。分析の結果、適量飲酒者（0.1~4.9g/日）に対する多量飲酒者（女性：30g/日以上、男性：60g/日以上）の全死亡ハザード比は女性で 1.27、男性で 1.53 となった。飲酒量と飲酒関連がんの死亡率には強い関連がみられ、特に男性で顕著であった。また、暴力による死傷との関連は男性のみでみられた。心臓血管病の死亡率においては飲酒量との関連はみられず、非飲酒者のほうが適度飲酒者に比べてハザード比が高かった。とくに男性では、全死亡率がワインよりもビールに強く関連しているようであった。喫煙の影響としては、多量飲酒の 60 歳女性の 10 年全死亡リスクが非喫煙者で 5%、現喫煙者で 7%であり、多量飲酒の 60 歳男性ではそれぞれ 11%、18%であった。

以上から、飲酒は、全死亡率、飲酒関連がんによる死亡、暴力による死傷と明らかな関連がみられるが、心臓血管病との関連はわずかであることが示された。また、死亡の絶対リスクから、飲酒が全死亡率の重要な決定因子であることが示唆された。

出典：British Medical Journal open. 2014; 4(7): e005245